

## *The Spanish Tragedy* についての一考察

—— 劇構造の観点から ——

酒 井 正 志

Thomas Kyd の *The Spanish Tragedy* はエリザベス朝演劇の中で「復讐悲劇」と分類される作品中最も古い時期に属するものの一つとされています。息子 Horatio を殺されたスペインの司法官 Hieronimo が、スペイン王の甥にあたる Lorenzo とポルトガル王子 Balthazar という二人の殺害者に復讐するというのがこの作品の大筋ですが、Hieronimo は劇の大詰 4 幕 4 場で Lorenzo の父、スペイン王の弟にあたる Castile 公をも殺害します。この Castile 公殺害は Hieronimo の復讐の主題とは無縁のものだとして、古くから多くの評家に非難されてきました。1901年に Kyd の全集本を編んだ F. S. Boas はその序論で「かくして復讐という荒々しい正義は単なる虐殺と化し、真の悲劇精神によって書かれた情況は崩壊して一連の血を凍らすような事件に堕している。finis coronat opus（結末が作品を完成させる）という原理がこれほどまで無残に冒瀆されたことはなかった。」<sup>1)</sup> と Hieronimo の Castile 公殺戮を非難しています。F. T. Bowers はエリザベス朝における「復讐悲劇」の系譜をたどった労作、*Elizabethan Revenge Tragedy* の中で、「Lorenzo を殺害したのち、Hieronimo は許しを乞うことを拒否し、Castile 公をも殺害するが、この時、Hieronimo は人々の同情を得るところか、イギリス人の正義の感覚から遠く隔たったところへ来てしまっている。」<sup>2)</sup> とし、さらに、Hieronimo がスペイン王に事の真相を訴えて正当な正義を求めようとするのを Lorenzo の妨害にあって果たせず、公けの復讐を諦めて秘かに奸計を用いようとする時、「彼はイギリス人の判断力に従えば、必然的に villain になるのだ。」<sup>3)</sup> と手厳しく批判します。それでは、何故 Hi-

eronimo は Castile 公を殺害したのでしょうか。

Bowers の復讐悲劇研究よりも数年前の1931年, Lily B. Campbell は *Modern Philology* に ‘Theories of Revenge in Renaissance England’ という論文を寄せています。批評家がイギリスルネッサンスの「復讐悲劇」を Seneca の悲劇との関係からだけ論じていて, 当時の思想家たちが復讐の問題に対して抱いていた関心や復讐の哲学が等閑視されてきたとし, 当時の文献に広くあたって, 結局, 「Shakespeare 時代のイギリス人の倫理的教えにあっては, 復讐は強く非難されていた。」<sup>14)</sup> と女史は主張します。彼らの復讐断罪の理論的根拠となったのは, 何ととっても, 聖書の教えです。

悪をもて悪に報いず, 凡ての人のまへに善からんことを図り, 汝らの  
為し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。愛する者よ, 自ら復讐すな,  
ただ神の怒りに任せまつれ。録して「主いひ給ふ, 復讐するは我にあり  
我これを報いん」とあり。

(ロマ書12章17節—19節)

神は悪によって悪に報いることを禁じると同時に, 神ご自身が復讐して下さることを公言しているのです。ここには復讐に対する神の命令と約束とが述べられている訳です。女史によれば, 復讐には, 「神の復讐」「神によって支配者に委ねられた公けの復讐」そして「神にも神の代理者たる国家によっても禁じられた私的復讐」の三つがあります。しかし, 当時は「神は時として正義を行うご自身の道具として私的復讐者をお用いになることがある。」<sup>15)</sup> と考えられていたので, 「Kyd, Chapman, Shakespeare, Webster, Tourneur らの私的復讐を扱った悲劇を読む時には次の二点を常に考慮していなければならない。」<sup>16)</sup> と彼女は考えます。つまり,

復讐者が公けの復讐者の特権を己れの身につける権利を持ったうえで

神の正義を他人に向って行使しているかどうか台詞によって明らかにされているか。

神が復讐者に対して復讐を行うか否かがプロットによって明らかにされているか。

この二つの視点から出発して、*The Spanish Tragedy* を研究し、どちらの疑問にも “Yes” の答を出したのが Ernst de Chickera の ‘Divine Justice and Private Revenge in *The Spanish Tragedy*’<sup>7)</sup> です。息子 Horatio を殺されたあと、犯人も分らぬままに、Hieronimo は何度も「復讐」を口にしますが、常に神の正義を信じている Hieronimo が追求しているのは私的復讐ではなく、Campbell のいう第一と第二の復讐、つまり、「神の復讐」「神によって支配者に委ねられた公けの復讐（ここでは法による断罪）」なのです。ところが “Vindicta mihi (復讐するは我にあり)” と約束して下さった神の復讐もなかなか降らず、法の裁きを降してくれる筈の国王に対する訴えも Lorenzo によって阻まれてしまいます。そして最終的には、Hieronimo は Horatio の恋人 Bel-imperia の助けを借り、自らを神の正義の道具として復讐行為を行う。従って、Hieronimo の行為は単なる私的復讐ではないのだというのが Chickera の主張です。ただ、彼は専ら Hieronimo の Lorenzo と Balthazar に対する復讐だけを念頭に置いて論を進めており、Castile 公殺害については全く触れていません。Campbell の提出した第二の視点について Chickera の語るところはこうです。劇の最終幕 4 幕 5 場で、Ghost が Hieronimo を “good Hieronimo” と呼び、 “I’ll lead Hieronimo where Orpheus plays, / Adding sweet pleasure of eternal days.”<sup>8)</sup> (IV. v. 23-24) との約束をします。ここで Hieronimo はその復讐行為の故に罰せられていないことが明らかにされています。そこで Chickera はこの第二の視点に対しても “Yes” を発する訳ですが、今、Ghost とは一体何者でしょうか。もし Ghost が神と同一視できるなら、彼の主張は首肯できますが、残念ながら、この点に関しては彼は何の説明をも加えていません。Hiero-

nimo の復讐が単なる私的復讐でないこと、たとえ Ghost にてあれ、Hieronimo の復讐行為が断罪されていないことは認めるとしても、Hieronimo による Castile 公殺害という、今、我々が当面している課題には、満足のいく解決は与えられていません。Chickera の他にも Ratliff, Laird, Jensen<sup>3)</sup> らが Hieronimo の復讐が私的復讐かどうかを論じていますが、いずれも我々の問題には直接答えていません。

開幕劈頭、舞台に Andrea の Ghost と Revenge が登場し、“Here sit we down to see the mystery, / And serve for Chorus in this tragedy.” (I. i. 90-91) と語ります。彼ら二人は劇の最初から最後まで常に舞台上にいて、そこで演ぜられる “the mystery” を観客と共に見、と同時に、各幕 (Act) の終る度に劇の Chorus 役をも務めます。そこで *The Spanish Tragedy* という一つの劇空間の中に、Ghost と Revenge の属する空間と主に Hieronimo が復讐を追求するアクションが占める空間という二つの異空間が存在することになります。今、前者を外構造、後者を内構造と呼んでみます。劇は一見この二つの構造が何の関係ももたずに進行していくかに見えます。たとえば、Bowers がこの劇の主筋、Hieronimo の息子 Horatio の為の復讐、ばかりに注視する結果、劇の後半は Ghost の復讐の動機から発してもいず、また、復讐も Ghost の殺害者に向けられてもいないから、「Ghost はこの劇とは実は何の関係も持っていないのだ。」<sup>10)</sup> と言う時、彼はこの二つの構造が何の関係も持たないと認めていることになります。しかし検討してみると二つの構造が全く別個に独立しているのではないことが判明します。

内構造において Hieronimo は息子 Horatio の死に対して Lorenzo と Balthazar に復讐を果たす訳ですが、殺された Balthazar は外構造においては、後に詳述するように、Ghost の復讐の相手でした。こうして内構造における復讐の成就是外構造における復讐の成就をも意味することになります。もちろん、Hieronimo は息子の復讐だけを念頭において

Balthazar と Lorenzo を殺すのですが、劇の構造から観ると、結局、それは Ghost の復讐にもなるのです。この時の二つの構造の関係を「共有」と呼んでおきましょう。

最愛の息子 Horatio を殺されたあと、3幕2場で、Hieronimo は犯人を明らかにして欲しいと神に呼びかけますが、すると何処からともなく一枚の手紙が落ちてきます。兄 Lorenzo と Balthazar に幽閉された Bel-imperia が血で書いたものです。

For want of ink, receive this bloody writ.  
Me hath my hapless brother hid from thee:  
Revenge thyself on Balthazar and him,  
For these were they that murdered thy son.  
Hieronimo, revenge Horatio's death,  
And better fare than Bel-imperia doth.

(Ⅲ. ii. 26-31)

Hieronimo はこの手紙の内容を直ちに信じることには戸惑いを感じます。二人が一体何の恨みを Horatio に抱いていたのか彼には全く分かりませんし、兄をこういう形で告発する Bel-imperia の態度にも得心がいきません。何よりも、この手紙は自分を陥し入れる為に仕掛けられた罠かもしれないと彼は考えます。そこで「まずそれとなく見ていよう。この手紙を裏付ける証拠をできるだけ集めよう……Bel-imperia にも会って、もっと聞き出そう。だがこちらの心を見せてはならない。」と決心します。3幕7場では紋首係の役人が、処刑したばかりの Pedringano のポケットからでてきた Lorenzo 宛の助命嘆願の手紙を、Hieronimo の許へ届けに来ます。この手紙の中にも Horatio 殺害の経緯が述べられていました。Hieronimo は先の Bel-imperia の手紙が真実のものであったことを確認できたのです。しかし彼は直接の復讐行為には走らず、まず王の許へ訴えに行きます。

I will go plain me to my lord the king,  
And cry aloud for justice through the court,  
(Ⅲ. vii. 69-70)

3幕12場で、彼は王に直訴を試みますが、丁度居合わせた Lorenzo によって阻まれてしまいます。ここに至って初めて Hieronimo は自らの手で復讐を果たすことを誓うのですが、それでもまだ実際の行動にはできません。

Thus therefore will I rest me in unrest,  
Dissembling quiet in unquietness,  
Not seeming that I know their villainies,  
That my simplicity may make them think  
That ignorantly I will let all slip:  
(Ⅲ. xiii. 29-33)

そして3幕14場では Castile 公の仲介で一時的ではありますが Lorenzo と仲直りをするのです。これが Hieronimo の有名な復讐遅延の全容です。3幕全体が復讐遅延の為に使われているとも考えられますが、今、注目したいのは3幕の最終場、外構造にあたる15場です。二幕の終りで Ghost に「ここを立ち去る時が来るまでには、Balthazar の惨めなありさまを見せてあげよう。」と約束した Revenge が三幕の間ずっと眠り込んでいたことが明らかにされます。内構造の主人公が復讐を遅延させている間、外構造の Revenge は仮眠を続けているのです。それぞれの構造の復讐の遅延と Revenge の仮眠とが照応している訳です。この時の二つの構造の関係を「照応」と名付けたいと思います。

1幕1場に立ち戻ってみましょう。Revenge は Ghost に向かってこう語ります。

Then know, Andrea, that thou art arriv'd  
Where thou shalt see the author of thy death,  
Don Balthazar the prince of Portingale,  
Depriv'd of life by Bel-imperia:

(I. i. 86-89)

劇全体を見終ると、「命を奪われる」のは、Revenge がここで語ったのは違って、Balthazar だけにとどまらないことが分ります。まず、Ghost の親友 Horatio が死に、Balthazar の召使 Serberine が Pedringano によって殺され、その Pedringano は絞首台の露と消えます。次に息子の死を嘆き悲しんで母 Isabella が自殺します。そして「劇中劇」の中で、Balthazar は Bel-imperia に、Lorenzo は Hieronimo に刺殺され、同時に Bel-imperia も自らの命を断ち、最後に Hieronimo が Castile を殺して自害します。Ghost は Revenge から「Balthazar の死を見ることになるだろう」と言われたのですが、実際には、これだけ多くの人が彼の観ている前で死んでいくのです。とりわけ友人 Horatio と生前の恋人 Bel-imperia の死は Ghost にとって大きな驚きであったに違いありません。内構造のこうした事件を舞台上で見ている Ghost は一体どのような所作をすればよいのでしょうか。残念ながらテキストには内構造を見つめている時の Ghost の所作に対するト書きは皆無です。しかし内構造に対して Ghost にどう反応させるか、これは実際に上演する際、演出上の大きな問題になることは容易に想像されます。3幕15場であれほど憤慨してみせた Ghost のことですから、ただ無表情に舞台上に起きている内構造のアクションを見つめているはずはありません。それがどんなものになるにせよ、Ghost の所作は、内構造のアクションから一方的に要請されてくるように思われます。この時の二つの構造の関係を、一方の他方に対する「要請」と名付けることにします。

この作品の中に内構造、外構造という二つの構造を指定してみると、劇の進行に伴ってこの二つの構造の間に「共有」「照応」「要請」などの関係

が生まれてくることが明らかになりました。この作品のこうした構造とその構造間の関係の中に、実は、我々が本論の冒頭に抱いた「何故 Hieronimo は Castile 公を殺すのか」という疑問を解く鍵が隠されているように思われます。

スペインの宮廷人 Don Andrea は、一介の宮廷人に過ぎぬ身でありながら、生前、スペイン王の弟 Castile 公の娘 Bel-imperia の秘密の恋人でした。ポルトガルとの戦争に加わり、戦死し、冥府に下り、Minos, Aeacus, Rhadamanth の三人の裁判官の前に進み出る。三人の裁判官は Andrea を「恋の野原」で遇するべきか、あるいは、「戦いの場」で遇するべきかの決定を下しかねる。というのは Minos によると、Andrea は「恋に生き恋に死んだ。恋のために戦いに運命を賭け、武運破れて、恋も命も失った」からだ。そこで三人は彼を冥府の王 Pluto の許へ送ることにする。彼が Pluto の許へ行くと、その妃 Proserpine が判決決定を買って出て、Revenge の耳もとに何かささやく。するとたちまち Ghost は Revenge に導かれて現世に戻っていた。これが劇の外構造 1 幕 1 場で Andrea の Ghost が自ら語る事の経緯です。

Andrea 自らのこの説明に二つの疑問が湧いてきます。彼の死が戦死であるとすれば、もとより彼は自分の死に不平を言っても始まらない訳で、何故 Ghost は Revenge を伴って再び地上に戻ってくるのでしょうか。恋の為に戦いに運命を賭けて恋も命も失ったというのはどういう意味でしょうか。こうした疑問を観客に投げかけたまま、場面は、内構造たるスペインの宮廷へと移っていきます。

スペイン宮廷では、スペイン側の将軍がスペイン王にポルトガルとの戦いに勝利したことを報告しています。三時間にも及ぶ白兵戦ののち勝利はいずれの側に傾くとも見えなかった、その時、

Don Andrea, with his brave lancers,



In their main battle made so great a breach,  
 That, half dismay'd, the multitude retir'd:  
 But Balthazar, the Portingale's young prince,  
 Brought rescue and encourag'd them to stay:  
 Here-hence the fight was eagerly renew'd,  
 And in that conflict was Andrea slain—  
 Brave man at arms, but weak to Balthazar.

(I. ii. 65-72)

1 幕 1 場では Andrea の死は単に戦死としか語られなかったのですが、実はポルトガルの王子 Balthazar によって殺されたということが明らかにされます。しかしこの説明の限りでは、やはり、Ghost が Revenge を伴って地上へ戻ってくるほどのことはいらないようです。Bowers の言うように「復讐を求める Ghost を正当化するには充分といえない」<sup>11)</sup> かもしれません。2 幕 4 場では、生前 Andrea の恋人であった Bel-imperia に Andrea の友人であった Horatio が彼の最期の様子を語り聞かせます。

When both our armies were enjoind in fight,  
 Your worthy chevalier [=Andrea] amidst the thick'st,  
 For glorious cause still aiming at the fairest,  
 Was at the last by young Don Balthazar  
 Encounter'd hand to hand:

(I. iv. 9-13)

Andrea と Balthazar の一騎打ちになる訳ですが、そこへポルトガル軍の槍部隊が現われ、Andrea の乗った馬の腹を槍で貫き、その為 Andrea は大地へ投げ出されます。

Then young Don Balthazar with ruthless rage,

Taking advantage of his foe's distress,  
Did finish what his halberdiers begun,  
And left not till Andrea's life was done.

(I. iv. 23-26)

こうして Andrea は一騎打ちではなく、話を聞いていた Bel-imperia の言葉を借りるなら、「一騎打ちの作法も何も構わずに、大勢で寄ってたかって倒されてしまう」のです。ここまできてやっと我々は Ghost が Revenge を伴って地上へ戻ってきた理由を初めて納得することができました。「復讐を求める Ghost を正当化する」ことができた訳です。

ところで、Andrea がたとえこのように敵軍に寄ってたかって殺されたとしても、彼の死が戦死であったことに違いはありませんから、Andrea の Ghost が冥府へ下って行った時、三人の裁判官たちが、Ghost の身分をただちに「戦士」と決定して「傷ついた Hector がいつまでも苦しみながら生きている」「戦いの場」へ住まわせないのは何故でしょうか。「戦いの場」どころか、Aeacus は「ここから恋の野原へ移して恋人たちと共に歩ませ、緑の天人花の下や糸杉の蔭で永遠の時を過ごさせよう」とさえ提案します。我々は Andrea が生前 Bel-imperia を「秘密のうちに我がものにしていた」ということを想い起こさねばなりません。二人のこの秘密の恋が Bel-imperia の父 Castile 公と兄 Lorenzo に露見してしまうのです。Andrea 亡きあとの第二の恋人 Horatio を殺された Bel-imperia は一時 Lorenzo と Balthazar に幽閉されますが、幽閉を解かれたとき、彼女は兄に Horatio 殺害の理由を糺します。Lorenzo の返答はこうです。

Why then, remembering that old disgrace  
Which you for Don Andrea had endur'd,  
And now were likely longer to sustain,  
By being found so meanly accompanied,

Thought rather, for I knew no readier mean,  
To thrust Horatio forth my father's way.

(Ⅲ. x. 54-59)

Bel-imperia が身分の低い Horatio と一緒にあずまやの中にいるのを父 Castile 公が見たらきっと怒るだろうと考え、Lorenzo は Horatio をとにかくも父親の眼に入らないように追い払おうという気になったということです。しかもその時、Bel-imperia があの Andrea のおかげで被った昔の不面目を思い出したのだと言います。この不面目とは Bel-imperia が身分の低い Andrea——身分が低いということは Ghost も自認するところです。My name was Don Andrea, my descent, / Though not ignoble, yet inferior far / To gracious fortunes of my tender youth (I. i. 5-7) ——と恋仲になったことを指しています。身分の低い男と自分の娘が恋をしていることに Castile 公は腹を立てるのです。Lorenzo は Bel-imperia の新しい恋の相手が誰であるのか知ろうとして Bel-imperia の召使 Pedringano を金で買収し、彼女の秘密を探り出そうとします。

it is not long thou know'st,  
Since I did shield thee from my father's wrath  
For thy conveyance in Andrea's love,  
For which thou wert adjudg'd to punishment.

(Ⅱ. i. 45-49)

と言って Pedringano を懐柔しますが、この台詞からも Castile 公の腹立ちを察することができます。娘に対する Castile 公自身の言葉からもそのことは明瞭です。

How now, girl?  
Why com'st thou sadly to salute us thus?

Content thyself, for I am satisfied,  
 It is not now as when Andrea liv'd,  
 We have forgotten and forgiven that,  
 And thou art graced with a happier love.

(Ⅲ. xiv. 108-113)

ここで Castile 公が言う “a happier love” とは Bel-imperia とポルトガル王子 Balthazar とのいわば政略結婚を意味しますが, Andrea と違って身分の高い Balthazar との婚約が整い, あのこと (that = that old disgrace) はもう忘れもしたし許したと Castile 公は言っているのです。野島秀勝氏はこの Castile 公の台詞の110行目 “I am satisfied” の satisfied に「不気味な含みを感じ」とっています。そして Castile 父子は「積極的に『忘れ』去る手を講じたのではないか」「もっと端的に言えばアンドリアを体よく除き去ろうとしたのではないか」と主張します<sup>12)</sup> Empson も「Castile 公と Lorenzo は Bel-imperia とポルトガル王子 Balthazar とを結婚できるように Andrea を戦いで殺させるように手を打っておいたのだ。恐らく二人は敵の王子に——彼が戦いで Andrea を殺す訳だが——Andrea がどのあたりに送り込まれ, どのように彼を識別したらよいかを知らせておいたのである。」<sup>13)</sup> という大胆な仮説を建てます。この仮説をテキストから直接論証するのは難しいのですが, こう考えないと, 冥府の三人の裁判官が Ghost の安住の地を「戦いの場」か「恋の野原」か決定できなかったことの意味が解釈できないという点で大変魅力ある仮説です。もちろん, 戦争状態に入っている相手国の王子に自国の一宮廷人を殺させるなどということはまずあり得ないであろうことは考慮に入れておかねばなりません。ただ, Empson の仮説まではいかなくとも, Castile 公が身分の低い Andrea を娘の恋人として絶対に認めなかったであろうことは確かです。

こうして開幕劈頭の外構造の中で我々に投げかけられた疑問は劇の進行に伴い解決されました。そして Balthazar と Castile 公が共に Ghost

の復讐の対象としてはっきりとした姿を浮かびあがらせてきます。

ここまでくればもう事態は明らかです。外構造における Ghost の復讐の対象 Gastile 公の内構造における殺害は、外構造の内構造に対する「要請」なのです。Hieronimo は Andrea の復讐の為に Castile 公をも殺害することになるのです。我々是这样してこの作品の持つ劇構造を手がかりに、Hieronimo の Castile 公殺害の理由を明らかにすることができました。

### 注

- 1) Boas, F. S., ed., *The Works of Thomas Kyd*, Oxford: The Clarendon Press, 1967, p. xxxix.
- 2) Bowers, F., *Elizabethan Revenge Tragedy 1587-1642*, Princeton: Princeton U. P., 1966, p. 81.
- 3) *Ibid.*, p. 77.
- 4) Campbell, L. B., "Theories of Revenge in Renaissance England," *MP*, XXVIII, p. 281.
- 5) *Ibid.*, p. 292.
- 6) *Ibid.*, p. 296.
- 7) De Chickera, E., "Divine Justice and Private Revenge in *The Spanish Tragedy*," *MLR*, LXII, pp. 228-232.
- 8) Text には Edwards, P., ed., *The Spanish Tragedy*, Manchester: U. P., 1977. を用い、日本語訳は、「エリザベス朝演劇集」, 筑摩書房に収録の村上淑郎氏の訳を適宜利用させて頂いた。
- 9) Ratliff, J. D., "Hieronimo Explains Himself," *SP*, LIV, pp. 112-118. Laird, D., "Hieronimo's Dilemma," *SP*, LXII, pp. 137-46. Jensen, E. J., "Kyd's *Spanish Tragedy*: The Play Explains Itself," *JEGP*, LXIV, pp. 7-16.
- 10) Bowers, F., *op. cit.*, p. 71.
- 11) Bowers, F., *op. cit.*, p. 66, n.
- 12) 野島秀勝, 「近代文学の虚実」東京: 南雲堂, 1971, p. 199.
- 13) Empson, W., "*The Spanish Tragedy*," *Elizabethan Drama: Modern Essays in Criticism*, ed., R. J. Kaufmann, Oxford, 1961, p. 60.